

# 東北公益文科大学 総合研究論集

第 27 号

世界市民としてのアイデンティティ  
—「固有の文化」幻想の超克—（その 1）

森 彰夫

2015 年 1 月 23 日発行

# 世界市民としてのアイデンティティ —「固有の文化」幻想の超克—（その1）

森 彰夫

## はじめに

グローバリゼーションが進み、グローバル人材になることや多文化共生社会を実現することが求められてきている。ヨーロッパでは統合が進められ、国境の意味が減ってきている一方で、スコットランドのイギリスからの分離独立、カタルーニャのスペインからの分離独立というような運動に見られるように、民族的なアイデンティティに基づいた国造りをしたいという運動が強くなっている。

坂本龍馬が藩という小さな枠組みに囚われているべきではないと考え土佐藩を脱藩したように、日本という小さな枠組みに囚われているべきではなく世界市民（コスモポリタン）として考えるべきなのか。自らの民族的なアイデンティティを自覚してこそグローバルに活躍できるのであり、「日本固有の文化」を大切にすべきと考えるべきなのか。岐路に立っている我々は、考え方を整理する必要に迫られている。

本稿では、アイデンティティの分析については、まず日本人とドイツ人<sup>1</sup>のアイデンティティに絞って考察する。

## 1. アイデンティティ

アイデンティティの基本的な問題は、「私は誰か」、「我々は誰か」、すなわち、人が社会的および心理的にどこに帰属しているかということである。

フランス人は、チーズが好きで、フランス革命によってもたらされた啓蒙主

---

<sup>1</sup> 紙幅の関係からドイツ人のアイデンティティおよびコスモポリタニズムについては、「世界市民としてのアイデンティティ—「固有の文化」幻想の超克—（その2）」で考察する。

義や変革を誇りに思っている。イギリス人は、クリケットや紅茶が好きで、古くからある民主主義の伝統に誇りを持っている。アメリカ人はステーキと大型車が好きで、建国した偉人たちを敬愛している。・・・このようなステレオタイプの特徴は、すべてのこれらの国民に共有されているわけではなく、異なった度合いで様々な特徴が主張されるのである。

共通の文化、歴史、血縁関係、言語、宗教、領土に基づいた集団的な心情が、特定の民族的アイデンティティとして共有するように主張する人々によって訴えられている。現在ではそのような民族的アイデンティティは民族国家(nation-state)の市民に属するが、明確な民族的アイデンティティは、ケベック、カタルーニャ、バスク、スコットランドのような国家を持たない民族に属する人びとによっても共有される<sup>2</sup>。これらの人々は、カナダ、スペイン、イギリスに支配・抑圧されてきた民族としてのアイデンティティを共有しているのである。南北アメリカにおける先住民、本国以外に居住している東欧諸民族<sup>3</sup>、植民地時代にひかれた国境線の外に居住するアフリカ諸民族、クルド、ウイグル、チベット、アイヌ、琉球・・・というように枚挙にいとまがない国家を持たない民族に属する人びとによっても共有され、米国、中南米諸国、中国、日本など自民族以外の民族が支配する国に支配・抑圧されてきた民族としてのアイデンティティを共有しているのである。

モンセラト・ギベルナウ<sup>4</sup>が論じているように、自治政治制度の建設は、帰属意識を発生させる傾向がある。たとえば、地域のアイデンティティに関するイギリス、カナダ、スペインにおける権限委譲の研究によれば、「領域を支配し人々の生活に違いをもたらすほど十分な権力と資源を持った自治政治制度が、たとえば、1979年以降のスペインにおいて新設された自治共同体の市民の間で、既存のアイデンティティを強化するだけでなく、かつて存在していなかった帰属・共有するアイデンティティを育てる傾向がある」<sup>5</sup>。また、「民族のアイデンティティと同様にヨーロッパのアイデンティティが、国家によって植えつけられるときは、様々な人々のあいだの連帯の絆を養うために設計された

<sup>2</sup> Guibernau (2007), p. 11.

<sup>3</sup> 森 (2003年)、森 (2008年)、森 (2011年)、森 (2014年) 参照。

<sup>4</sup> スペインからの独立を主張してきた。カタルーニャ出身。ロンドンのクイーン・メリー大学教授。

<sup>5</sup> Guibernau (2007), p. 112.

トップダウンで制度的に作り出されたアイデンティティ」という特徴がある<sup>6</sup>。

このような少数民族のアイデンティティの主張に対して、自由主義の視点から、個人の諸権利が常に第一でなければならず、そしてこれらが差別禁止の諸規定とともに、集団的目標に対しても優越しなければならないという見解は、ジョン・ロールズ<sup>7</sup>、ロナルド・ドゥオーキン<sup>8</sup>、ブルース・アッカーマン<sup>9</sup>らによって研究され擁護されてきた<sup>10</sup>。

これに対してチャールズ・テイラー<sup>11</sup>は「ドゥオーキンの主張によれば・・・近代の社会の多様性を前提にする場合、[政治社会の]擁護する美徳の観念を支持しているのは、一部の人々にとどまらざるをえないからである。彼らは多数派であるかも知れない。実際、そうである可能性はきわめて高い。なぜならば、もしそうでないなら、民主主義社会は多分、彼らの見解を支持しないであろうから。それにもかかわらず、この見解はすべての人々の見解ではないであろう。そして社会がこの実質的な見解を支持するとき、この社会は意見を異にする少数派を平等な尊敬をもって扱ってはいないことになるであろう。この社会は彼らに対して次のように言うことになるだろう。“あなたたちの見解は、この政治社会の目から見て、多数派の同胞市民の見解ほどには価値がない。”と、自由主義的見解を批判している<sup>12</sup>。

ケベックにおけるフランス語文化の存続と繁栄が善であることは、自明のことであるが、テイラーは、「政治社会は、次の二者の間、すなわち我々の祖先の文化に忠実であり続けることに価値を置く人々と、自己発展という個人的な目標の名のもとにここから逃れることを欲するかもしれない人々との間で、中立的立場をとらないのである」<sup>13</sup>と問題点を指摘している。

---

<sup>6</sup> Guibernau (2007), p. 113.

<sup>7</sup> John Rawls (1921年 - 2002年)。米国の哲学者。主に倫理学、政治哲学の分野で、リベラリズムと社会契約の再興に大きな影響を与えた。

<sup>8</sup> Ronald Dworkin (1931年 - 2013年)。米国の法哲学者である。晩年はユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン法学部および、ニューヨーク大学法科大学院の教授。

<sup>9</sup> Bruce Arnold Ackerman (1943年 - )。米国の憲法学者。エール大学教授。

<sup>10</sup> Rawls (1985) 223-51; Dworkin (1978); Ackerman (1980)

<sup>11</sup> Charles Margrave Taylor (1931年11月5日 - )。カナダの政治哲学者。ケベック新民主党結成に参画。

<sup>12</sup> テイラー (1996年) p. 78.

<sup>13</sup> テイラー (1996年) p. 80.

さらにテイラーは、「一方における、真正さを欠き同質化を強いる、価値の平等の承認の要求と、他方における、自民族中心主義的な基準の内部への自閉との間に、中道が存在するはずである。我々とは異なる諸文化が存在し、世界のレベルにおいても、またそれぞれの社会のなかにおいて混ざり合う形においても、より一層の共生が必要となっている」<sup>14</sup>と論じている。しかし、そもそも諸文化の価値は始源性と現代性があるように固定的ではなく平等といえるのか、「中道」などというものが存在するのか、検討しなければならない。

ユルゲン・ハーバーマス<sup>15</sup>が論じているように、「ナショナリズムの運動はほとんどいつもフランス革命から生じた共和主義的な国民国家を模範に形成されてきた」のである。ハーバーマスは、「第一世代の国民国家と比べれば、イタリアやドイツは“遅れてきた国家”であった。第二次世界大戦後の植民地解放の時代はまた別の文脈を提示している。そしてオスマン帝国やオーストリア＝ハンガリー帝国、あるいはソビエト連邦のような帝国の崩壊期における配置状況は、さらに異なっている。国民国家の形成の途上で生じた、バスク人、クルド人、北アイルランド人のような民族的少数派の状況は、さらにまた異なっている。そしてイスラエル国家の建設は、アラブ人が領有を主張しているイギリスのパレスティナ委任統治領において、民族的一宗教的な運動およびアウシュヴィッツの恐怖から生じた特殊なケースである」と分類している<sup>16</sup>。

そして、国民国家形成の追求による新しい国境線は新しい民族的少数派を生じさせるという矛盾を孕んでいる<sup>17</sup>。この問題はハーバーマスも、「“民族浄化”という犠牲——政治的にも道徳的にも正当化されない犠牲——を払わずには消滅しない。民族自決への“権利”の相反する性質は3つの異なる国にまたがって

---

<sup>14</sup> テイラー（1996年）p. 100.

<sup>15</sup> Jürgen Habermas（1929年 - ）。ドイツの哲学者、社会哲学者、政治哲学者。父がグマースバッハの商工会議所会頭でナチス黨員であったこともあり、少年期をヒトラー・ユーゲントの一員として過ごし、敗戦を迎えた。アメリカ占領下での民主主義教育は、彼の思想形成に大きな影響を与えた。フランクフルト学派第二世代に位置する。

<sup>16</sup> ハーバーマス（1996年）p. 170. エリック・ホブズボームやアーネスト・ゲルナーも、ネーションという観念はフランス革命以降の近代になってから、ネーションという意識を基礎に人為的に形成されたとし、国民（ネーション）およびナショナリズムを近代特有の産物とみる。これに対して、アントニー・D・スミスは、それ以前から存在する文化的共同体（エトニ、エスニーとも訳される）との連続性を重視する立場をとる。

<sup>17</sup> 森（2011年）pp. 68-84.

広がるクルド人や、民族集団が互いに無慈悲に戦い合っているボスニア＝ヘルツェゴヴィナのケースにおいて明らかに示されている」と指摘している<sup>18</sup>。

立憲国家は文化的再生産の実行を可能にするが、しかしそれを保証することはできない。ハーバーマスが論じているように、「存続を保証することは必然的にその構成員から、彼らが自分たちの文化的伝統を所有および保存するのであれば必要とされるところの諾否を表明する自由を奪い去ってしまうからである。文化が反省的なものとなるとき、自らを維持することができる唯一の伝統や生の形式とは、自らを批判的な検証に委ね、後の世代に対しては他の伝統から学修したり、あるいは改宗したり、他国へと移住したりする選択肢を残しながら、同時にその構成員を拘束するようなものである。このことはペンシルバニア・アーミッシュ派<sup>19</sup>のような比較的閉じられたセクトにさえ当てはまることである。たとえまるでそれが絶滅の危機に瀕した種であるかのように文化を保護することが意味のある目標だと考えられたとしても、そうした文化が再生産されうのに必要な条件は、“差異を、現在だけでなく永遠に、維持し大切にする”（テイラー）という目標とは両立できない」のである<sup>20</sup>。

伝統を維持しようとする原理主義を含めた運動が活発化しているが、ハーバーマスが論じているように、「原理主義の運動は復古主義的な手段によって自分自身の生活世界に究極の安定性をもたらそうとする皮肉な試みとして理解することができる。・・・実際、それは社会的近代化の渦中から現れたものであって、すでに崩壊した実態を模倣しているだけである。伝統主義とはそれ自体、近代化に向けられた圧倒的な圧力に対する反動であり、完全に近代的な性格を持つ再生の運動なのである。ナショナリズムもまた原理主義へと転化する可能性がある」のである<sup>21</sup>。

典型的な例としてラシュディ事件<sup>22</sup>が挙げられる。ハーバーマスの「不寛容

<sup>18</sup> ハーバーマス（1996年）p. 180、森（2011年）pp. 69-72.

<sup>19</sup> 米国のペンシルベニア州・中西部などやカナダ・オンタリオ州などに居住するドイツ系移民（ペンシルベニア・ダッチも含まれる）の宗教集団で、電気などの近代文明の利用を拒否し移民当時の生活様式を保持し、農耕や牧畜によって自給自足生活をしている。人口は20万人以上いるとされている。

<sup>20</sup> ハーバーマス（1996年）p. 185.

<sup>21</sup> ハーバーマス（1996年）p. 187.

<sup>22</sup> 1988年に発表された、イギリスの作家サルマン・ラシュディがムハンマドの生涯を題材に書いた小説。日本では、筑波大学助教授五十嵐一によって邦訳（『悪魔の詩（上・下）』、新泉社、1990年）

の実践へと向かう原理主義は民主的立憲国家とは両立不可能なものである。そうした実践は特権化された生の様式の排他性を主張する宗教的あるいは歴史的・一哲学的な世界解釈にもとづいている。こうした構想には「理性の重荷」（ロールズ）への尊重が欠落しているだけでなく、自分たちの主張の可謬性についての意識も欠落している」という指摘は核心を突いている<sup>23</sup>。

テイラーは、個人にとって自らのアイデンティティが適切に承認されることが必要であるという主張に基礎を置き、また、このアイデンティティの一部として民族・文化的アイデンティティを位置づけて、「差異の政治」の評価を行おうとしている。これに対してキムリッカ<sup>24</sup>は、民族的アイデンティティへの承認の必要性は主張しているが、それは社会構成的文化の保障を通して個人の自由を確保することが重要だからであり、彼がアイデンティティの承認にそれ自体で価値があるという主張を行っているわけではない<sup>25</sup>。

多様な多文化主義理論の中で、キムリッカの議論は、個人の自由の確保という、その出発点に特徴があるが、他の理論の基本的主張と重なり合う部分も多く持っている<sup>26</sup>。しかし、キムリッカの議論は、アメリカ合衆国の黒人のように民族とエスニック集団のどちらにも当てはまらない集団を彼の理論全体の中でどのように位置づければよいのか、女性や障害者などのマイノリティ集団には認めない権利をエスニック集団に与えることについての議論が不十分といえる。また、文化の変容を積極的に捉えてはいるものの、それは各文化の内部での変化であり、それに対し、諸文化の勢力関係が変動することは、キムリッカの理論からは認められないのではないか、という疑問も生じる。

キムリッカの理論は、北米を中心として、西欧諸国やオーストラリア、

---

がなされた。イスラムの聖典クルアーン中には神の預言として、メッカの多神教の神々を認めるかのような記述がなされている章句がある。後に預言者ムハンマドは、その章句を神の預言によるものではなく悪魔によるものとしたが、ラシュディはこれを揶揄したとされる。具体的に言うと、原題のThe Satanic Versesはクルアーンそのものを暗示しているとも見られる。この他にも、ムハンマドの12人の妻たちと同じ名前を持つ12人の売春婦が登場するなど、イスラムに対する揶揄が多くちりばめられている。イラン最高指導者ホメイニによるラシュディの死刑宣告に続き、各国の翻訳者・出版関係者を標的とした暗殺事件が発生した。

<sup>23</sup> ハーバーマス（1996年）p. 188.

<sup>24</sup> Will Kymlicka（1962年－）。カナダの政治哲学者。カナダ・クイーンズ大学哲学部教授。

<sup>25</sup> キムリッカ（1998年）pp.122-159.

<sup>26</sup> キムリッカ（1998年）pp.118-121.

ニュージーランドを視野に入れて展開されている。これらの地域では、共通の言語を中核とした社会構成的文化が存在しており、それぞれの下での個人の自由の実質化の問題を考えることが可能であった。キムリッカがいうように、社会構成的文化の形成が近代化の所産であるとすれば、東欧やロシア、南米においても、社会構成的文化が一定程度形成されている地域は多く、彼の理論を適用しようという試みがなされている<sup>27</sup>。これに対して、アジアやアフリカの多くの地域においては、植民地化の負の遺産の影響も強く、社会構成的文化の形成が不十分である。多数の言語が多層的に入り組んで存在しているような場合、キムリッカの理論は適用することはできない。国民国家形成の追求による新しい国境線は新しい民族的少数派を生じさせ、強制的な同化政策をとるという矛盾に対して答えているといえない。また、そもそも社会構成的文化が存在しない限り自由は不可能なのか、という問題が提起できるであろう。

## 2. 日本人のアイデンティティ

### (1) 自然崇拝・祖先崇拝で愛国心育成

文部科学省が中心になって世界遺産への登録運動が進められてきているが、2004年に世界遺産に登録された「紀伊山地の霊場と参詣道」<sup>28</sup>と2013年に登録された「富士山-信仰の対象と芸術の源泉」<sup>29</sup>には、修験道や山岳信仰を日本人古来の精神文化として保護し復活させたいという思惑で登録運動が進められた側面がある。山形県村山地方・庄内地方に広がる月山・羽黒山・湯殿山にも、修験道を中心とした山岳信仰があり、日本人古来の精神文化として保護し復活させたいという思惑でさまざまな取り組みが行われている。

安倍政権は愛国心に基づいた道徳教育を重視し、教育委員会を改革<sup>30</sup>し、教育現場へ徹底させる体制を作ろうとしている。日本は自然崇拝・祖先崇拝が第

<sup>27</sup> Pettai (2001) pp. 259-169, Opalski (2001) pp. 298-319.

<sup>28</sup> 紀伊山地の霊場と参詣道は、和歌山県・奈良県・三重県にまたがる3つの霊場（吉野・大峰、熊野三山、高野山）と参詣道（熊野参詣道、大峯奥駈道、高野山町石道）を登録対象とする世界遺産（文化遺産）である。

<sup>29</sup> 富士山を神体山として、また信仰の対象として考えることなどを指して富士信仰と言われる。

<sup>30</sup> <https://www.jimin.jp/activity/news/124038.html>



1層、儒教が第2層、西洋からの科学技術が第3層を成している、というような捉え方に基づき、「日本人古来の精神文化」を復活させたいという思惑によってなされているといえる。

信教の自由<sup>31</sup>は保障されているのであり、そのような道德教育は宗教法人が設立したミッションスクールか私財を投じた私塾でやるべきことであり、国立や公設の教育機関で行うべきことではない。

## （2）儒教で忠君愛国

儒教は、東周春秋時代、魯の孔子によって体系化され、堯・舜、文武周公の古えの君子の政治を理想の時代として祖述し、仁義の道を実践し、上下秩序の弁別を唱えた。儒教は、五常（仁、義、礼、智、信）という徳性を拡充することにより五倫（父子、君臣、夫婦、長幼、朋友）関係を維持することを教える。その教団は諸子百家の一家となって儒家となり、（支配者の）徳による王道で天下を治めるべきであり、同時代の（支配者の）武力による覇道を批判し、事実、その様に歴史が推移してきたとする徳治主義を主張し、漢代、国家の教学として認定された事によって儒教が成立した。

朱子によって再構築された儒教の新しい学問体系である朱子学は、礼教にもとづく国家体制作りに利用され、君臣倫理などの狭い範囲で活用された。日本でも朱子学が台頭し、水戸藩の藩校である弘道館の水戸学などで、天皇を中心とした国づくりをするべきという尊王論と尊王攘夷運動が起り、後の倒幕運動と明治維新へ繋がっていくのである。1890年（明治23年）、『教育勅語』<sup>32</sup>が

---

<sup>31</sup> 日本国憲法 第20条

1. 信教の自由は、何人に対してもこれを保障する。いかなる宗教団体も、国から特権を受け、又は政治上の権力を行使してはならない。
2. 何人も、宗教上の行為、祝典、儀式又は行事に参加することを強制されない。
3. 国及びその機関は、宗教教育その他いかなる宗教的活動もしてはならない。

<sup>32</sup> 朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世世厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉已レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ徳器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其徳ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

下賜されると六論<sup>33</sup>は近代日本の道徳思想として本格的に採用された。軍部の一部では特に朱子学に心酔する者が多く、二・二六事件<sup>34</sup>や満州事変<sup>35</sup>にも影響を与えた。今日において、尊王論、『教育勅語』、二・二六事件や満州事変を支持することはできないのと同様に、それらに影響を与え、それらを支えた思想を支持することはできず、総括こそが必要である。

1871年8月、廃藩置県で藩校は廃止されたが、1872年9月、学制発布後の中等・高等諸学校の直接または間接の母体となった。藩校は、江戸時代に、諸藩が藩士の子弟を教育するために設立した学校で、教育内容は、四書五經の素読と習字を中心としていた。しかし、仁義を説き、仁義のない君子は打倒してよいという孟子<sup>36</sup>ではなく、ことさら忠が尊重された。庄内藩の致道館<sup>37</sup>が教学としていた徂徠学は、荻生徂徠<sup>38</sup>が朱子学に立脚した古典解釈を批判し、古代中国の古典を読み解く方法論としての古文辞学（護国学派）を確立したもので、儒教をより古典に立脚して解釈しようとしたものである。

藩校自体は、幕藩体制を維持するために各藩が儒教を藩士の子弟に教えた

---

第二次世界大戦後、1948年（昭和23年）6月19日には、衆議院で「教育勅語等排除に関する決議」、参議院で「教育勅語等の失効確認に関する決議」が、それぞれ決議されて、教育勅語は学校教育から排除・失効されたことが確認された。

<sup>33</sup> 1397年に明の創始者であり、初代皇帝である朱元璋（洪武帝）が発布した「孝順父母、尊敬長上、和睦郷里、教訓子孫、各安生理、母作非為（父母に孝順にせよ、長上を尊敬せよ、郷里に和睦せよ、子孫を教訓せよ、各々生理に安んぜよ、非為をなすなかれ）」の六言をさす。

<sup>34</sup> 国家社会主義者北一輝が記した『日本改造法案大綱』の天皇を手中に収め邪魔者を殺し皇道派が主権を握ることを目的とした「昭和維新」「尊皇討奸」の影響を受けた皇道派の青年将校らが、1936年（昭和11年）2月26日から2月29日にかけて1483名の兵を率いて起こしたクーデター未遂事件。政治家と財閥系大企業との癒着が代表する政治腐敗や、大恐慌から続く深刻な不況等の現状を打破する必要性を声高に叫び、岡田啓介内閣総理大臣、鈴木貫太郎侍従長、斎藤實内大臣、高橋是清大蔵大臣、渡辺錠太郎陸軍教育總監、牧野伸顯前内大臣を襲撃、総理大臣官邸、警視庁、陸軍省、参謀本部、東京朝日新聞を占拠した。

<sup>35</sup> 1931年9月18日に中華民国奉天（現瀋陽）郊外の柳条湖で、関東軍が南満州鉄道の線路を爆破した事件（柳条湖事件）に端を発し、関東軍による満州（現中国東北部）全土の占領を経て、1933年5月31日の塘沽協定成立に至る、日本と中華民国との間の武力紛争（事変）である。「王道楽土」、「五族協和」をスローガンとし満蒙領有計画を立案した関東軍作戦参謀石原莞爾中佐と関東軍高級参謀板垣征四郎大佐が首謀し、軍事行動の口火とするため自ら行った陰謀であったことが戦後のGHQの調査などにより判明している。

<sup>36</sup> 天子の位にあったとはいえ、仁義のない「残賊」にすでに天命はなく、ただの民と同じであるとし、孟子の天命説は武力による君主の放伐さえも容認するものであった。

<sup>37</sup> 庄内藩の士風の刷新と、優れた人材の育成を目的に、文化2年（1805）酒井家九代目藩主・忠徳公が創設した藩校で、徂徠学を教学としていた。

<sup>38</sup> （1666年 - 1728年）。江戸時代中期の儒学者・思想家・文献学者。

いう歴史的に特定の役割を担った学校であり、今日の教育において体験学習させるといようなことは、戦前の価値観を復古させようとするアナクロニズムである。また、特定の宗教の体験学習を強制するということの誤りも認識されていない。

儒教は先祖や年長者をことさら弁別し敬うことを求める。愛国心はことさら自国を愛することを求める。しかし、今日必要なのは、隣人愛や世界全体を愛しむ気持ちである。儒教は古えの君子の政治を理想とした歴史的な限界をもった思想であり、君主制やナショナリズムの克服が求められる今日にあっては、桎梏としての役割を果たしている。

### (3) 外来の日本の固有性

日本民族、日本語、日本文化などは固有のものであるという言説がなされるが、そのような言説はどのように成立するのか。代表的な言説は、本居宣長<sup>39</sup>に遡ることができる。本居宣長は、『源氏物語』の中にみられる「もののあはれ」という日本固有の情緒こそ文学の本質であると提唱し、大昔から脈々と伝わる自然情緒や精神を第一義とし、外来的な儒教の教え（「漢意」）を自然に背く考えであると非難し、中華文明や思想を尊重する荻生徂徠を批判した。そして、『古事記』の解説に成功し『古事記』註釈の集大成である『古事記伝』を著した。

『古事記』<sup>40</sup>と『日本書紀』<sup>41</sup>は、天武天皇の勅命によって編纂されたもので、日本と天皇がいかなる起源からどのように成ったかの物語を伝承資料によって再構成されている。天武は672年の壬申の乱に勝利して即位したが、663年の白村江における唐・新羅連合軍との戦いで日本の軍勢が敗北し、朝鮮半島との間に境界を設け、防備するとともに国家の体制的な整備をする必要があったのである。

<sup>39</sup> (1730年 - 1801年)。江戸時代の国学者・文献学者・医師。

<sup>40</sup> 天地開闢から日本列島の形成と国土の整備が語られ、天孫降臨を経てイワレヒコ（神武天皇の誕生までを記した「日本神話」から始まる日本最古の歴史書。天皇が日本を統治する根拠とされたのは、天照大神が「天壤無窮」に葦原中国を治めよという神勅をニニギ（瓊瓊杵尊）とその子孫に下し、ニニギの曾孫である磐余彦が初代の天皇・「神武天皇」として即位したことによる。その序によれば、712年に太朝臣安萬侶（太安万侶とも表記）が編纂し、元明天皇に献上された。

<sup>41</sup> 舍人親王らの撰で、720年に完成した歴史書。

このことから、子安宣邦<sup>42</sup>は、「日本の成立史とは、「韓」からの離脱史である」とし、『日本書紀』にスサノオが高天原を追放されてまず新羅国に降ったと記していることなど、記紀における「韓」の数え切れない痕跡について論じている<sup>43</sup>。

この「韓」の痕跡を無視することができなかった藤貞幹<sup>44</sup>は、『衝口発』で、皇統、言語、姓氏、国号から衣服、喪祭、祭祀など15項目にわたって日本固有説ではなく、「漢」－「韓」の文化によって日本古代社会が大きく規定されていることを論じた。本居宣長は、これを狂人の書として『鉗狂人』で批判して論争となった。子安は、「宣長は、比喩的な反発の言語をもってしか日本列島における言語の固有性を語りえない」と論じている<sup>45</sup>。

#### （４）宗教からの世俗化

吉本隆明<sup>46</sup>は、「本当の意味のナショナルなものがないと、世界性を持つことができない・・・ヨーロッパ、たとえばフランス人なんかはフランス一番なんです。ドイツ語でいうイーバーアレス（世界に冠たる）なんです。世界は必ずフランス文化のところに行くとか、食物までフランス料理のところに行くとおもっているのです。・・・日本も柳田國男<sup>47</sup>と折口信夫<sup>48</sup>のやりかたを持ってこない、漱石・鴎外ではやや不足というか、かれらだけでは日本の固有性を主張できないとおもいます。固有性を主張できないと世界性も主張できない」と論じている<sup>49</sup>。

柳田國男は『遠野物語』で、東北地方の神隠し<sup>50</sup>、ザシキワラシ<sup>51</sup>、山の神<sup>52</sup>、

<sup>42</sup> (1933年－)。日本の思想史研究者。大阪大学名誉教授。

<sup>43</sup> 子安 (2007年) pp. 21-23.

<sup>44</sup> (とう ていかん、1732年－1797年)。江戸時代中期の有職故実研究家。

<sup>45</sup> 子安 (2007年) p. 31.

<sup>46</sup> (1924年－2012年)。日本の思想家、詩人、評論家。

<sup>47</sup> (1875年－1962年)。日本の民俗学者・官僚。

<sup>48</sup> (1887年－1953年)。日本の民俗学者、国文学者、国語学者であり、彼の成し遂げた研究は「折口学」と総称され、柳田國男の高弟として民俗学の基礎を築いた。

<sup>49</sup> 吉本・笠原 (2006年) pp. 30-33.

<sup>50</sup> 人間がある日忽然と消えうせる現象。神域である山や森で、人が行方不明になったり、街や里からなんの前触れも無く失踪することを、神の仕業としてとらえた概念。

<sup>51</sup> 主に岩手県に伝えられる精霊的な存在。座敷または蔵に住む神と言われ、家人に悪戯を働く、見た者には幸運が訪れる、家に富をもたらすなどの伝承がある。

<sup>52</sup> 山に宿る神の総称で、名称は地域により異なる。農民の間では、春になると山の神が、山から降りてきて田の神となり、秋には再び山に戻るという信仰がある。

河童<sup>53</sup>などの伝承を記録した。これらの伝承が伝えられてきているのは事実であるが、科学技術が発達した現代において日本の固有性として主張することはできない。始源性を認めるのは当然であるが、過去の歴史である。「月山で神々を見た」などと発言する人々がいるが、暴風雨になったり、豪雪になったりするのとは低気圧が原因であり、神々のなせる業であると信じるのは迷信の類であるといわざるをえない。

仏教の行事では、発祥地であるインドの仏教において、臨終の日（命日）を含めて7日ごと、7週に亘り法要を行っていた。（古代インド文明の七進法による。）輪廻の思想により、人の没後49日目に、次に六道中のどの世界に生まれ変わるかが決まる、と考えられていたからである。また、その、元の生と次の生との中間的な存在である、49日間の状態「中陰」、もしくは「中有」と呼んでいた。それが日本に伝わり、宗旨によって考え方は様々であるが、人は死後、魂を清めて仏になる為に中陰の道を歩き、あの世を目指す。その所々に審判の門があり、生前の罪が裁かれる。罪が重いと魂を清めるため地獄に落とされるが、遺族が中陰法要を行い、お経の声が審判官に届けば赦される。それが初七日（しょなのか）、二七日（ふたなのか）、三七日（みなのか）、四七日（よなのか）、初月忌、五七日（いつなのか）、六七日（むなのか）、七七日（ななののか）（四十九日、満中陰、尽七日）と7日毎に行う法要で、閻魔大王は五七日に現れる。現代日本人の大半は、法事を親族が集う慣習として行っていて、輪廻転生、浄土や閻魔大王の存在を信じて行っている人は少ない。

キリスト教やイスラム教では神が世界のすべてを創造したと位置づけられているが、科学的な根拠を示すことはできない。神が存在すること、輪廻転生、浄土や閻魔大王の存在も科学的な根拠を示すことはできない。このように科学的に根拠を示しえない事柄について、現代の意識的な人々は不可知論者となっている。神は存在しないというのは無神論者であるが、不可知論者からすれば、神が存在しないということも科学的な根拠を示すことはできない。科学が発達した今日では、ことさら始源性に基づいたアイデンティティを持つことを主張

---

<sup>53</sup> 日本の妖怪・伝説上の動物、または未確認動物。ほぼ日本全国で伝承され、その呼び名や形状も各地方によって異なる。水神、またはその依り代、またはその仮の姿ともいう。鬼、天狗と並んで日本の妖怪の中で最も有名なものの一つとされる。

することは人為的にナショナリズムを煽ることに他ならない。

すでに16世紀にミュンツァー<sup>54</sup>は、カトリック教ばかりではなくむしろキリスト教一般のすべての主要点を攻撃し、汎神論<sup>55</sup>を教えていた。信仰とは人間のうちなる理性の復活以外の何ものでもないし、かかる信仰によって、すなわち理性の復活によって、人間は神化され至福をうることができ、それゆえ天国はけっして彼岸のものではなくて、かかる生活のなかに求められるべきであり、この天国を、すなわち神の王国をこの地上に建設することが信者の天職で、彼岸の天国がないのと同様、彼岸の地獄も、永劫の罪もまたありえず、また同じく人間の悪しき快楽や欲望以外には悪魔なども存在しない<sup>56</sup>と教えていた。

デユルケムは「未開人の道徳を特徴付けているのは・・・人間が他の人間に対してもつ義務ではなくして、神に対してもつ義務なのである。道徳の規律は、神にたいしてではなく、人間にたいして設定され、神は、道徳を効果あるものとするために関与するにすぎない。したがって、われわれの義務の内容は、宗教的観念から大幅に独立する。宗教的観念は、われわれの義務を支えるが、これを根底から打ち立てるものではない。プロテスタンティズムの確立とともに、もっぱら礼拝本来の役割が減少したことにより、道徳の自律性が増大した。・・・当初において、神と道徳という二つの体系をかたく結び付け、一体化させていた絆は、次第に弛緩していった。そして、いまやわれわれは。この絆を一刀のもとに両断する日を、歴史の流れのうちに迎えている。革命は、久しい以前から準備されていたのであって、いまやその機が熟したのである」<sup>57</sup>

<sup>54</sup> Thomas Müntzer (1489年 - 1525年)。1519年にルターと知り合い信奉者となる。アルシュテットで共産主義生活の集落をつくり説教活動を行い、農業や林業で暮らす労働者に強い反響を呼び、ミュンツァーは、下層階級の要求を弾圧し、諸侯に妥協しているルターの姿勢を批判した。1524年、西南ドイツに波及した農民一揆に呼応して、テューリンゲンとマンスフェルトで革命を組織するためにミュールハウゼンに戻るが、ザクセン・ブラウンシュヴァイク・ヘッセン諸侯の連合軍に敗れ、捕らわれて妻とともに斬首された。

<sup>55</sup> 全ての物体や概念・法則が神の顕現であり神性を持つ、あるいは神そのものであるとする世界観・哲学。汎神論的要素は多神教・一神教問わずほとんどの宗教の神理解に存在しているとされる。万物に神性が宿るならば神性の有無を論じるのは無意味となるとして、無神論に分類されることも稀にある。森羅万象を神と定義づけてしまうと人間の中にも神が宿っていることとなり、すなわち人間が犯す罪は神が犯した罪ということになり、神を唯一無二の存在（＝唯一神）であるとするためには、人間を含む自然界を超越した無謬の存在でなくてはならないのに、それが守れなくなるから、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の信者の中には汎神論を否定する人々がいる。

<sup>56</sup> エンゲルス（2003年）pp. 96-97.

<sup>57</sup> デユルケム（2010年）pp. 50-52.



と論じている。デユルケムは、宗教に依拠しない道德教育の必要性を論じたのである。フランス革命は貴族階級と聖職者階級の支配を打倒する革命であったが、今日までフランスではミッションスクールであっても教育と宗教教育には明確な一線を引いている。

マルクスは『ヘーゲル法哲学批判序説』で、「反宗教的批判の基礎は、人間が宗教をつくるのであり、宗教が人間をつくるのではない、ということにある。しかも宗教は、自分自身をまだ自分のものとしていない人間か、または一度は自分のものとしてもまた喪失してしまった人間か、いずれかの人間の自己意識であり自己感情なのである。しかし人間というものは、この世界の外部にうずくまっている抽象的な存在ではない。人間とはすなわち人間の世界であり、国家であり、社会的結合である。この国家、この社会的結合が倒錯した世界であるがゆえに、倒錯した世界意識である宗教を生み出すのである。宗教は、この世界の一般的理論であり、その百科全書的要綱であり、その通俗的なかたちをとった論理学であり、その唯心論的な体面にかかわる問題であり、その熱狂であり、その道徳的承認であり、その儀式ばった補完であり、その慰めと正当化との一般的根拠である。宗教は、人間の本質が真の現実性をもたないがために、人間の本質を空想的に実現したものである。それゆえ、宗教に対する闘争は、間接的には、宗教という芳香をただよわせているこの世界に対する闘争なのである。宗教上の悲惨は、現実的な悲惨の表現でもあるし、現実的な悲惨にたいする抗議でもある。宗教は抑圧された生きものの溜息であり、非情な世界の心情であるとともに、精神を失った状態の精神である。それは民衆の阿片である」と書いている<sup>58</sup>。

吉本らはマルクスのこうした考え方に対して、「環境が良くなっても社会が良くなっても、宗教はなくなる。・・・宗教というものの原因は社会にあるのではなくて、人間存在という問題にある。人間存在というのはプラスの面とマイナスの面がある。肯定と否定がある。そういうなかでマイナスというか否定の問題、端的にいうと人間が死ぬ、いつかは死ぬということが、宗教の最大の問題、原因であるとおもわれる」と反論している<sup>59</sup>。

---

<sup>58</sup> マルクス（1974年）pp. 71-72.

<sup>59</sup> 吉本・笠原（2006年）pp. 134-135.

吉本は、マルクス主義の問題を「観念的な活動を全部、敵対化したものとして排除してしまったから、もうそれは制約になりますね。特にひどいのは文学でした。これから長くたてば可能性があるかもしれませんが、いまはそうではない。ロシアではせっかくトルストイとかドストエフスキーとか、世界文学の中でも超一級品の優れた文学者がいたのに、その後はろくな奴が出てこないわけです。精神活動を制約してしまえば、出てくるわけないんですよ」と論じている<sup>60</sup>。スターリン時代のプロレタリア文学は画一的で吉本の指摘する通りといえるが、トルストイやドストエフスキーの文学は、現実的な悲惨にたいする抗議でもあり、ロシア革命に至るロシア史のなかで不可避免的に登場したと考えるべきであろう。ドストエフスキーの文学が超一級品なのは、ドストエフスキー自らが空想主義的社会主义サークルに所属していたことからシベリアへ流刑されていたように、ロシア社会が抱える問題に真正面から取り組み、ロシアの人々の宗教などの思想的な問題を描いているからである。

阿片というのは中毒症状があり有害であると同時に苦痛や苦悩を和らげる効果があり、歴史的に存在してきているものといえ、宗教もその意味では同様なものと考えられる。しかし、死に対する恐怖は、科学では解決できないと思われてきたが、医学の進歩によってそれも変わってきている。エイズ・ウィルスが発見され原因不明の死がひとつ減り、様々なウィルスに対するワクチンが開発され、iPS細胞の開発により難病治療の可能性が生まれ、モルヒネによる緩和ケアによって末期癌患者の死に対する考え方も変わってきている<sup>61</sup>。

現代の日本人のアイデンティティは、無宗教および西洋とアジアの折衷にあるのであり、ことさら戦前を美とするような歴史観や特定の宗教に結び付ける必要はない。

吉本らも、「無思想、あるいは無宗教というのは日本人の特色であるといわれていますが、無思想、無宗教というのは、形態ではなくて内容を表すためにむしろ「無」という言葉を使っている場合もあるのではないかとおもいます。普通でいうところの思想、宗教ではない、という意味で使っているのではない

<sup>60</sup> 吉本・笠原（2006年）pp. 138-139.

<sup>61</sup> 鎌田（2000年）参照。末期癌患者は激痛から死の恐怖を味わうが、緩和ケアによって激痛がなくなれば、笑顔が戻り死に対する恐怖に慄くより残された時間を有意義に生きようとするという。



か。日本人の特徴は思想ではない思想性、宗教ではない宗教性、あるいは論理的とは限らない、ある意味でのあいまいな表現で、あえていうならば新しい思想を表現している」と認めている<sup>62</sup>。宗教からの世俗化には科学技術の発展という決定的な原因があり、復古主義ではなく、世俗化した新しい思想を構築していくべきである。

吉本は、矛盾していることも整理せず、肯定してきているため、議論が混乱する。たとえば、「日本の原始的な、あるいは始源的な宗教性の型であって、それはいまも存続している。どういう形でそれが存続しているかと考えると、縁日の金魚すくいとか、京都のお寺巡りを観光でした時、本堂に入る前になんとなく手を合わせたり・・・近所の寺の暮れの百八つの鐘には行っていますよ。そういう習俗・習慣になった神道とか仏教とか信仰という形でもそれは捨てざる意味合いはないんだ。また効能は期待していないけど、ただ縁日のときに金魚すくいはできるよ、面白いということで信仰はどうでもいいけど、それはやりたい。四国八十八箇所のお寺も行ってみたいわけですよ・・・あそこは弘法大師のディズニーランドですからね。じゃ神主の親玉を天皇として考えると天皇制を認めるのかということになる。ぼくは困るわけです。昔、戦争中は信仰していたけれど、いま別にそういうことはないし」<sup>63</sup>、という具合である。お寺で手を合わせたり、キリスト教の教会で十字を切ったり、四国八十八箇所のお遍路参りをするというのは、信仰に基づいた、あるいは関連した行為であって、単なる習俗・習慣ではない。

## (5) 封建制の残滓

ヨーロッパ封建制の子である騎士道に相当するのが、日本の封建制の子である武士道である。新渡戸稲造<sup>64</sup>は『武士道』を1900年に初版の英語版を刊行したが、やがてドイツ語、フランス語など各国語に訳されベストセラーとなった。

---

<sup>62</sup> 吉本・笠原（2006年）pp. 35-36.

<sup>63</sup> 吉本・笠原（2006年）pp. 149-152.

<sup>64</sup> （1862年 - 1933年）藩主南部利剛の用人を務めた盛岡藩士新渡戸十次郎の三男として生まれる。札幌農学校（後の北海道大学）の二期生として、内村鑑三らとともにキリスト教に入信。1884年、「太平洋の架け橋」になりたいとアメリカに私費留学し、ジョンズ・ホプキンス大学に入学。1891年に帰国し、教授として札幌農学校に赴任。

日本語訳の出版は日露戦争後の1908年のことであった。1920年の国際連盟設立に際して、教育者で『武士道』の著者として国際的に高名な新渡戸が事務次長のひとりに選ばれた。

新渡戸は、「武士道は、武士がその職業において、またその日常生活において守るべき道を意味する。一言でいえば、“武士の掟”、武人階級の身分に伴う義務のことである」<sup>65</sup>り、「〈武士道〉は日本の国花である桜におとらず、日本の土の固有の花である。しかし武士道は、日本史の植物標本室に保存されている、古代の美德の乾いた標本ではない。武士道は、今なお、私たちのあいだにあっては、力と美を備えた生きたものである。・・・昔はあったが今はもう存在しない遙かな星々が、今なお私たちにその光を投げつけているのと同様に、封建制の子である武士道は、その母なる制度より生きのびて、今なお私たちの道徳の歩む道を照らしている」と、武士道を日本固有の文化として存在していると主張した<sup>66</sup>。

新渡戸は、「仏教は〈運命〉の信受、避けられないものへの静かな服従、危険や災害に直面してのあのストア的な心の平静、あの生の軽蔑と死との親しみの心を与え、・・・仏教が教えることのできなかったものを、神道がゆたかに提供した。およそ他の宗教では教えられないような、君主に対する忠、祖先の記憶への崇敬、親に対する孝が、神道の教理によって熱心に教えこまれ、他の点では傲岸不遜なサムライの性格に、受動性を与えた」と、仏教と神道の関係を述べている<sup>67</sup>。

さらに、新渡戸は、「私たちの自然崇拜によって、その国は私たちの魂の最

<sup>65</sup> 新渡戸（2000年）p. 50. 士農工商の「士」のみが武士道を担っていたのであり、「農工商」は直接的には武士道とは無縁である。なお、士農工商は、儒教において社会の主要な構成要素（官吏・農民・職人・商人）を指す概念である。「四民」ともいう。日本では、近代になり江戸時代の身分制度を意味すると捉えられるようになったが、1990年代ごろから実証的研究が進み、士農工商の職業概念は実際の身分制度とは大きく異なっていることが指摘されている。江戸時代の諸制度に実際に現れる身分は、「士」（武士）を上位にし、農、商ではなく、「百姓」と「町人」を並べるものであった。また、「工」という概念はなく、町に住む職人は町人、村に住む職人は百姓とされた。この制度では、百姓を村単位で、町人を町単位で把握し、両者の間に上下関係はなかった。なお、百姓の生業は農業に限られるものではなく、海運業や手工業などによって財を成した者も多くいた。江戸時代における百姓とは農業専従者である「農人」ではなく商人、職人を含む農村居住者全般を意味する言葉であった。

<sup>66</sup> 新渡戸（2000年）pp. 47-48.

<sup>67</sup> 新渡戸（2000年）pp. 58-59.

奥に親しくなった。一方、その祖先崇拜は、家系を次々とたどってゆけば、皇室を全国民の源泉とした。私たちにあって国はそこから金を掘ったり、麦を穫ったりする国土や土壌にとどまらない——国は私たちの父祖の霊である神々の聖なる住家である。私たちにあって〈天皇〉は、〈法治国家〉の〈保安武官長〉ではなく、ましてや〈文化国家<sup>68)</sup>〉の〈保護者〉でもない——天皇は地上において身体をそなえ〈天〉の代理をする者であり、その人格の中に、天の權威と天の慈悲とを兼ね備えている。・・・イギリス王室は權威の権化であるばかりでなく、国民統合の創造者であり象徴である——私の信ずるところでは、このことは日本皇室については2倍も3倍も確かめることができよう」と。自然崇拜、祖先崇拜、天皇制の関係について述べている<sup>69)</sup>。

そして新渡戸は、これらと武士道の関係を、「神道の教義は、日本民族の感情生活の支配的な2つの特徴——〈愛国心〉と〈忠義〉——を含んでいる。・・・この宗教が表現した民族感情といったほうがもっと正確だろうか——は、〈武士道〉に君主への忠義と国への愛とを徹底的に吹きこんだのだった。そしてこの忠君愛国心は、教理としてよりむしろ推進力として働いたのだった」と、正確に位置づけている<sup>70)</sup>。

新渡戸は、儒教との関係を、「厳密な倫理の教えについては、孔子の教えが〈武士道〉の最も滋養にとむ源流だった。孔子の人倫五常の論述——主従（支配する者と支配される者）、父子、夫婦、長幼、朋友——は、孔子の著作が中国から導入される前から、民族本能がすでに確認していたことの追認にすぎなかった。孔子の政治倫理の教えは、・・・支配階級をなしていたサムライに、とくによく適合した。孔子の貴族的、保守的な調子は、これらの武人政治家の要求によく適合した」と述べている<sup>71)</sup>。

明治維新に対する新渡戸の見方も特徴的である。「〈近代日本〉の建設者である佐久間、西郷、大久保、木戸の伝記、また言うまでもないことだが、伊藤、大隈、板垣など現存人物の回顧録をひもといてみたまえ——そうすれば、彼ら

<sup>68)</sup> 警察国家や教権国家にたいして、ドイツで生まれた国家理念。国家を文化発展に貢献させようとする理想主義。1945年敗戦後、日本でも天皇中心の皇国思想が崩壊し、代わってこれが唱えられた。

<sup>69)</sup> 新渡戸（2000年）p. 61.

<sup>70)</sup> 新渡戸（2000年）p. 62.

<sup>71)</sup> 新渡戸（2000年）pp. 63-64.

が考えかつ働いたのは、サムライたることの衝迫力の下であったことが<sup>72</sup>、わかるであろう」と、明治維新が武士道の下で行われたというのである<sup>72</sup>。

しかしながら、王政復古を経て明治政府を樹立した薩摩藩・長州藩らを中核とした新政府軍と、旧幕府勢力および奥羽越列藩同盟が戦った戊辰戦争では、いつまでも武士の時代を捨て切れなかった旧幕府勢力および奥羽越列藩同盟が敗北したのである。また、近代化を進める中央政府は1876年3月8日に廃刀令、同年8月5日に金禄公債証書発行条例を發布したが、この2つは帯刀・俸禄の支給という旧武士最後の特権を奪うものであり、同年10月24日に熊本県で「神風連の乱」、27日に福岡県で「秋月の乱」、28日に山口県で「萩の乱」、1877年に西郷隆盛<sup>73</sup>を盟主にして起こった西南戦争<sup>74</sup>が起り、西郷は西南戦争において没した。しかし、封建制の解体を目指し慎重派の大久保利通と対立していた木戸孝允が1877年に病死し、封建制の解体は徹底されなかった。

江戸幕府下の武士・百姓・町人（いわゆる士農工商）の別を廃止し、「四民平等」を謳った。しかし、1871年に制定された戸籍法に基づき翌年に編纂された壬申戸籍では、旧武士階級を士族、それ以外を平民とし、旧公家・大名や一部僧侶などを新たに華族として特権的階級とすると同時に、宮内省の支配の下に置くことになった。華族と士族には政府から家禄が与えられ、1876年の秩禄処分まで支給された。武士道が担ってきた封建制社会を平民社会へと変革することが求められていたが、封建制は解体が徹底されず、封建制社会を支えるための教理としてよりむしろ推進力として働いた武士道の忠君愛国心は、利用されることになった。

新渡戸は武士道の将来について、「西洋文明は私たちの国を進みぬいて、すでにこの国古来の修練の痕跡を一つのこらず拭い去ってしまったのだろうか。……一国民の性格を構成している心理的諸要素の集合体は、なかなかこわれないもので、そのことは、”魚のひれ、鳥のくちばし、肉食動物の牙など、

<sup>72</sup> 新渡戸（2000年）p. 228.

<sup>73</sup> 征韓論に端を発した明治六年政変で下野した西郷は、1874年、鹿児島県全域に私学校とその分校を創設した。その目的は、西郷と共に下野した不平士族たちを統率することと、県内の若者を教育することであった。

<sup>74</sup> 現在の熊本県・宮崎県・大分県・鹿児島県において起こった士族による武力反乱。明治初期の一連の士族反乱のうち最大規模で日本最後の内戦。

その生物種の他へ還元できない要素”と同じである」と述べている<sup>75</sup>。さらに、「ヨーロッパでは騎士道が封建制から乳離れして〈教会〉の養子となったとき、それは窮境をのりこえて活気を取り戻したのにひきかえ、日本では、どの宗教も武士道を養うに足るほど大きくなかった点にある。それゆえ、母制度である封建制が過ぎ去ってしまうと、〈武士道〉は孤児として残され、独力で何とかやっつけていかねばならなかった。現在の綿密な軍事組織は、武士道をその保護下におくこともできようが、近代戦は武士道の継続成長にほとんど余地を与えることができないことは、はっきりしている。神道は武士道の幼時にはそれを養ったが、もうそれ自体老朽化している」と、不満ともいえる意見を述べている<sup>76</sup>。

新渡戸は、「鴨緑江<sup>77</sup>において、朝鮮において、また満州において戦勝をおさめたものは、私たちの手を導き、私たちの心臓に鼓動しつつある、父祖の御霊なのである。彼ら、これらの御霊、私たちの武勇なる祖先の霊は、死んではいない。見る目のある人たちには、彼らははっきりと見える。最も進歩した思想をもった日本人を掻いてごらん。そうすれば彼が1個のサムライであることが明らかとなろう」と、自ら武士道が日本の帝国主義的侵略戦争において積極的な役割を果たしたことを認めているのである<sup>78</sup>。

## （6）近代国家の戦争と宗教

第二次世界大戦後、GHQのマッカーサーは、日本の軍国主義の温床であった軍隊を解体し、思想、信仰、集会及び言論の自由を制限していたあらゆる法令の廃止、特別高等警察の廃止、政治犯の即時釈放など、いわゆる「自由の指令」を出し、政治の民主化、政教分離などを徹底するため大日本帝国憲法の改正を指示し、財閥解体、農地解放、国家神道の廃止を指示した。

マッカーサーは、軍国主義の支柱であった天皇制も廃止する予定であったが、1945年9月27日に、昭和天皇を当時宿舎としていた駐日アメリカ大使館公邸に招いて会談を行った際に、天皇制を日本統治に利用した方がよいと考え直し、

<sup>75</sup> 新渡戸（2000年）p. 223.

<sup>76</sup> 新渡戸（2000年）pp. 239-240.

<sup>77</sup> 中国と北朝鮮の国境の川。

<sup>78</sup> 新渡戸（2000年）p. 246.

1946年1月1日の昭和天皇の詔書で、天皇が現人神（あらひとがみ）であることを自ら否定した「人間宣言」を請け、日本国憲法に国家象徴としての天皇（象徴天皇）の地位を導入した。このため、天皇制は象徴天皇制という形で残されることになった。貴族や高級軍人の子弟の教育機関であった宮内省直轄の学習院も解体される予定であったが、天皇を象徴として残すことにしたため、私立として存続させることになったのである。こうして、「天皇陛下万歳」と叫んで侵略戦争に多くの国民が動員され、内外で多大な犠牲をもたらした天皇の戦争責任自体はマッカーサーの指示で不問に付され、極東裁判でも取り上げられなかった。

極東裁判では28名の被告が起訴されたが、大東亜戦争の理念的提唱者であり唯一の民間人のA級戦犯として起訴された大川周明<sup>79</sup>が、法廷で東条英機の頭を叩くというような奇行から精神鑑定がなされ不起訴となった。このことから、皇国思想に基づいた日本を盟主とした八紘一字<sup>80</sup>や大東亜共栄圏<sup>81</sup>などの理念の総括が中途半端に終わってしまった。また、満蒙領有計画を立案し満

<sup>79</sup> (1886年 - 1957年)。山形県酒田市出身。日本の国家主義者。1918年、東亜経済調査局・満鉄調査部に勤務し、1920年、拓殖大学教授を兼任。1938年、法政大学教授大陸部（専門部）部長。近代日本の西洋化に対決し、精神面では日本主義、内政面では社会主義もしくは統制経済、外交面ではアジア主義を唱道した。

<sup>80</sup> 『日本書紀』卷第三神武天皇の条にある「掩八紘而爲宇」の文言を戦前の大正期に日蓮主義者の田中智學が国体研究に際して初めて使用し、縮約した語である。道義的に天下を一つの家にするという意味である。二・二六事件の反乱部隊の「蹶起趣意書」にも記述され、この事件に参加した皇道派は肅清されたが、日本政府の政策標語として、大東亜共栄圏の建設と併せて頻繁に使用されるようになった。1940年の第2次近衛内閣による基本国策要綱（閣議決定文書、7月26日）で、「皇国ノ国是ハ八紘ヲ一字トスル肇國ノ大精神ニ基キ世界平和ノ確立ヲ招来スルコトヲ以テ根本トシ先ツ皇國ヲ核心トシ日滿支ノ強固ナル結合ヲ根幹トスル大東亜ノ新秩序ヲ建設スルニ在リ」と表現されている。東京裁判の検察側意見では「八紘一字の伝統的文意は道徳であるが、・・・1930年に先立つ10年の間…これに続く幾年もの間、軍事侵略の諸手段は、八紘一字と皇道の名のもとに、繰り返し繰り返し唱道され、これら二つの理念は、遂には武力による世界支配の象徴となった」とした。アジア歴史資料センター（JACAR）リファレンスコードA08071307000 A級極東国際軍事裁判記録（和文）(NO.160) (105, 106枚目画像) (E-86, E-87)

<sup>81</sup> 大東亜共栄圏は、欧米諸国の植民地支配から東アジア・東南アジアを解放し、日本を盟主とする共済共栄の新たな国際秩序を建設しようという第二次世界大戦における日本の構想である。日本・満洲国・中華民国を一つの経済共同体（日滿支経済ブロック）とし、東南アジアを資源の供給地域に、南太平洋を国防圏として位置付けるものと考えられており、「大東亜が日本の生存圏」であると宣伝された。フィリピン第二共和国、ラオス王国、ビルマ国、満洲国の政府と汪兆銘政権（中華民国）は、実際にはいずれも日本政府や日本軍の指導の下に置かれた傀儡政権または従属国にしかすぎず、日本による植民地支配を目指したものに過ぎなかった。日本軍は共栄圏内において日本語による皇民化教育や宮城造営の推奨、神社造営、人物両面の資源の接収等を行い、実質的な独立を与えないまま敗北した。



州事変の首謀者であった関東軍作戦参謀石原莞爾中佐<sup>82</sup>もA級戦犯として起訴されたが、病気を理由に出廷せず、満州事変の総括が中途半端に終わってしまった。

さらには、伊丹万作<sup>83</sup>が言うように、「だまされたものの罪」も総括されてきていない。これは、イタリアのファシズムがホッチキス型で国民が一時的に結合されていたにすぎなかったのに対し、ナチズムと日本のファシズムは溶鉱炉型で国民の大半が同じ考え方を持たされファシズム体制を支えていたことの総括である。伊丹が論じているように、「あんなにも造作なくだまされるほど批判力を失い、思考力を失い、信念を失い、家畜的な盲従に自己の一切をゆだねるようになってしまっていた国民全体の文化的無気力、無自覚、無反省、無責任などが悪の本体なのである。このことは、過去の日本が、外国の力なしには封建制度も鎖国制度も独力で打破することができなかつた事実、個人の基本的人権さえも自力でつかみ得なかつた事実とまつたくその本質を等しくするものである」<sup>84</sup>。

憲法第9条2項では、「陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない」と規定されているにもかかわらず、1950年の朝鮮戦争勃発時、GHQの指令に基づくポツダム政令により警察予備隊が総理府の機関として組織され、旧海軍の残存部隊は海上保安庁を経て海上警備隊となり、その後警備隊として再編。さらに、1952年10月、警察予備隊は保安隊に改組、1954年7月、警察予備隊は陸上自衛隊に、警備隊は海上自衛隊に、新たに領空警備を行う航空自衛隊も新設され、それ以来、再軍備されてきた<sup>85</sup>。

<sup>82</sup> (1889年1月 - 1949年8月)。山形県鶴岡市出身。

<sup>83</sup> (1900年 - 1946年)。脚本家、映画監督、俳優、エッセイスト。映画監督・俳優・エッセイストの伊丹十三は実子。小説家の大江健三郎は娘婿。

<sup>84</sup> 伊丹 (1946年)。「多くの人が、今度の戦争でだまされていたという。・・・いくらだますものがないものであれ一人だまされるものがなかつたとしたら今度のような戦争は成り立たなかつたにちがいないのである。・・・そして、このことはまた、同時にあのような専横と圧制を支配者にゆるした国民の奴隷根性とも密接につながっているものである。・・・「だまされていた」という一語の持つ便利な効果におぼれて、一切の責任から解放された気である多くの人々の安易きわまる態度を見ると、私は日本国民の将来に対して暗澹たる不安を感じざるを得ない。「だまされていた」といって平気でいられる国民なら、おそらく今後も何度でもだまされるだろう。いや、現在ですでに別のうそによつてだまされ始めているにちがいないのである」。

<sup>85</sup> 自由民主党政府の解釈は、第9条1項は「独立国家に固有の自衛権までも否定する趣旨のものではなく、自衛のための必要最小限度の武力を行使することは認められているところである」と解し、

政教分離については、津地鎮祭訴訟<sup>86</sup>での最高裁判決で、「政教分離原則は、国家が宗教的に中立であることを要求するものではあるが、国家が宗教とのかかわり合いをもつことを全く許さないとするものではなく、宗教とのかかわり合いをもたず行為の目的及び効果にかんがみ、そのかかわり合いが右の諸条件に照らし相当とされる限度を超えるものと認められる場合にこれを許さないとするものであると解すべきである」として、原告の請求が棄却された。この判決は、子安が論じているように、「国家からの宗教の完全な分離を規定する政教分離の憲法原則を、法的判断の原則性を状況主義的判断の無原則性へと逸脱させる」ものであった<sup>87</sup>。国家による軍事力の公然たる所有も、法的判断の原則性を状況主義的判断の無原則性へと逸脱させる形で行われてきている。

近代国家は、国権の発動として対外的戦争を行うことのできる主権性をもつとともに、国民が国家のために戦争を行いうる目的としての国家という理念性をもつことが要請されるという特徴を持っている。子安が論じているように、「近代日本国家は神聖な天皇国家という目的としての理念性をもって成立する。同時に近代国家はそれ自体のために祀るのである。国家権力そのものの成立とその永続のために祀るのである・・・国家のための死者を国家はその永続をもたず礎として祀るのである。近代日本国家は神道的祭祀をもって祀ってきた。この国家の宗教性・祭祀性という問題は決して近代日本国家に特有の問題ではなく、近代国家一般に共通する問題」であり、近代国家のあり方自体が見直される必要がある<sup>88</sup>。これまで近代国家のあり方が総括されることなく、廃止されるべきものが残されたり復活されてきているため、周辺諸国と共通の歴史認

---

第2項に定める「戦力」の不保持も、「自衛のための必要最小限度の実力を保持することまで禁止する趣旨のものではない」としている。最高裁判所の判例も同様の見解を採り、自衛権留保説をとっている。それに対し、平和主義の立場から、自衛権も放棄しているとする見解（非武装中立論など）があり、「自衛のための必要最小限」とはどのような基準に基づくのか不明という批判がある。これまで、自民党政府を含め、他国に対する侵害を排除するための行為を行う集団的自衛権を行使することは憲法上許されないと解釈されてきたが、安倍内閣は閣議決定で、集団的自衛権を行使できるとした。

<sup>86</sup> 津市体育館建設起工式が1965年1月14日に行われた際に、市の職員が式典の進行係となり、大市神社の宮司ら4名の神職主宰のもとに神式に則って地鎮祭を行い、市長は大市神社に対して公金から挙式費用金7,663円の支出を行った。これに対し、津市議会議員が地方自治法第242条の2（住民訴訟）に基づき、損害補填を求めて出訴した。

<sup>87</sup> 子安（2004年）p. 20.

<sup>88</sup> 子安（2004年）p. 27.



識を持つことを妨げてきている。

《次号の（その2）に続く》

## 参考文献

- Ackerman, Bruce (1980), *Social Justice in the liberal State* (New Haven: Yale University Press)
- Dworkin, Ronald (1978), Taking Rights seriously, and “Liberalism” in *Public and Private Morality*, ed. Stuart Hampshire (Cambridge: Cambridge University Press)
- Guibernau, Montserrat (2007), *The Identity of Nations*, Polity
- Pettai, Vello (2001), ‘Definitions and Discourse: Applying Kymlicka’s Models to Estonia and Latvia’, in Kymlicka, Will, Opalski Magda (eds), *Can Liberal Pluralism be Exported?: Western Political Theory and Ethnic in Eastern Europe*, Oxford
- Opalski, Magda (2001), ‘Can Will Kymlicka be Exported to Russia?’, in Kymlicka, Will, Opalski Magda (eds), *Can Liberal Pluralism be Exported?: Western Political Theory and Ethnic in Eastern Europe*, Oxford
- Rawls, John (1985) A Theory of justice and “Justice as Fairness: Political Not Metaphisical,” *Philosophy & Public Affairs* 14: 223-51
- 伊丹万作（1946年）「戦争責任者の問題」『映画春秋』
- エンゲルス、フリードリッヒ、大内力訳（2003年）『ドイツ農民戦争』岩波書店
- 鎌田實（2000年）『がんばらない』集英社
- キムリッカ、ウィル、角田猛之・石山文彦・上田芳樹監訳（1998年）『多文化時代の市民権－マイノリティの権利と自由主義－』晃洋書房
- 子安宣邦（2004年）『国家と祭祀－国家神道の現在－』青土社
- 子安宣邦（2007年）『日本ナショナリズムの解読』白澤社
- センブリーニ、アンドレア、三浦信孝・長谷川秀樹訳（2003年）『多文化主義とは何か』白水社
- テラー・チャールズ（1996年）「承認をめぐる政治」テラー・チャールズ、ハーバーマス・ユルゲン他、佐々木毅・辻康夫・向山恭一訳『マルチカルチュラリズム』岩波書店所収

デユルケム・エミール著、麻生誠・山村健訳（2010年）『道徳教育論』講談社  
 新渡戸稲造（2000年）『武士道』教文館  
 ハーバーマス・ユルゲン（1996年）「民主的立憲国家における承認への闘争」  
 テーラー・チャールズ、ハーバーマス・ユルゲン他、佐々木毅・辻康夫・向  
 山恭一訳『マルチカルチュラリズム』岩波書店所収  
 マルクス、カール、城塚登訳（1974年）『ユダヤ人問題によせて、ヘーゲル法  
 哲学批判序説』岩波書店  
 森彰夫（2011年）『オルタナティブ国際関係論－国際機構と国際協力の改革へ  
 向けて－』彩流社  
 森彰夫（2003年）「EU拡大と東欧における地域協力」、森彰夫・今井正幸・和  
 田正武著『市場経済移行諸国の理想と現実－グローバル化下での可能  
 性－』所収、彩流社  
 森彰夫（2008年）「ウクライナ市場経済化と「オレンジ革命」－オリガーキー  
 の国家支配－」、森彰夫・今井正幸・和田正武・大田英明著『市場経済下の  
 苦悩と希望－21世紀における課題－』所収、彩流社  
 森彰夫（2014年）「ウクライナにおけるナショナリズムの暴走」『東北公益文  
 科大学総合研究論集』第26号  
 柳田國男（1955年）『遠野物語』角川文庫  
 吉本隆明『共同幻想論』（1968年）河出書房新社  
 吉本隆明・笠原芳光（2006年）『思想とは何か』春秋社